

パネルディスカッションに参加して

バーバラ・モリソン（宇都宮大学国際学部）

2008年7月16日、宇都宮大学多文化公共圏センター（CMP S）オープニングセレモニーが開催されました。今回一堂に会することとなった4人の方の活動は、外国人コミュニティーと日本人コミュニティーとの対話を支援するサービスや、国の行政・ボランティア団体・学校などによる支援活動を通しての交流支援など、それぞれの立場で日本の状況を変えつつあります。

パネルディスカッションのコメンテーターとして、この日のプレゼンテーションの概要を述べたいと思います。参加メンバーは、宇都宮市の国際交流プラザに勤務している中田和男氏。メサフレンドシップという名で知られる茨城県のボランティア団体に所属する根本久美子氏。青島正人氏は静岡県磐田市の行政職員であり、風巻浩氏は神奈川県の高校教員をされています。

まず、中田氏の発表から述べたいと思います。中田氏は、彼の所属する国際交流プラザが宇都宮市在住の外国人に提供しているサービスを中心にパワーポイントを使用して発表されました。それによりますと、2008年現在宇都宮市に在住する外国籍住民は8,059人でその詳細は、多い順から、中国、続いて韓国・朝鮮、ブラジル、タイ、フィリピンとなっています。また氏は、日本人住民と外国人住民間のコミュニケーション

を円滑にするためのサポート体制をさらに発展させること、双方の住民が「同じ住民である」という意識のための基本的枠組みや広報活動を構築することが必要だと強調されていました。

中田氏の発表で最も興味深かったのは、「地域活動参画」についてです。これは、日本人住民と外国人住民が一緒になって事業を計画ししていく方法で、今後双方の住民に何らかの影響を与えるだろうと思われます。

根本氏は、メサフレンドシップでの活動を通して得られた経験や見地をわれわれに披露してくれました。メサフレンドシップとは、1984年に有志で集まった人たちが茨城県に立ち上げたボランティア団体だそうです。ちなみに茨城県内に住む外国人住民は約52,000にまで伸びています。メサが力を入れている活動は、英語ディスカッション・日本語教室活動・ネットワーク作りやまとめ役や調整役を使ったネットワーク内での最適なコミュニケーション方法の学習会などとのことです。氏は、多文化共生の認識は一人ひとりに個人単位で少しずつ伝わっていくものであることを強調し、プレゼンテーションのまとめとしていました。

青島氏は静岡県磐田市役所に勤務しています。青島氏は発表の中で、多文化共生意

識の重要な側面としての柔軟性や、現在磐田市に在住する約1万人（この中で多数派はブラジル人で、以下多い順に中国人、フィリピン人、ペルー人となっている）の外国人へのサービス提供を特に強調されておられました。また、この磐田市で新たに拡大するコミュニティへの事業活動成果を報告されました。氏によると、磐田市が多文化共生主義を精力的に実践し始めたのは、比較的新しくここ5年くらいだそうです。しかしその間、磐田市在住外国人の多数派が使用するポルトガル語で書かれた生活情報パンフレットの配布、外国人情報窓口の充実などの成果をあげています。外国人情報窓口の充実では、2年ほど前から特にカウンターAとBを設けました。そしてAカウンターでは子どもの教育や、警察・消防などの保安面の情報を提供し、Bカウンターでは、ゴミの分別の仕方を、実物を使って具体的に分かりやすく説明しているそうです。

さらに、磐田市にはボランティアスタッフで組織される多文化交流センターがあります。ここでは、仕事が忙しい外国人住民の要望にこたえて、外国人児童生徒が放課後に通える居場所となっているそうです。

しかしながら青島氏はこれらの支援事業も単独では不十分であるといいます。そして、日本で暮らす外国人が個人の権利として要望を申し出ることを、日本人の間でも認識するレベルになることが大切だと強調されていました。

風巻氏は神奈川県の高校教師です。氏は教育者の視点から、多文化共生のあり方を語られました。特に氏の高校で行われてい

る韓国との交流活動を紹介され、多文化が共生できる社会としての日本を考えるのみならず、それらを含んだ全体としてのアジア（市民）を考えるべきだと述べられました。そして、日本の若者には多文化共生を実践する見本となる人やその意義が必要だとも述べられていました。風巻氏は発表の最後に、多文化共生社会を語る上で大切な概念として「conviviality」という単語をボードに示されました。この言葉は、「生命力」と「人生そのもの」を合わせたような意味を持っていて、今回のような刺激的なイベントの締めくくりにはとてもふさわしいものでした。